







病害虫発生予察情報予報第 12 号 (4 月の予報)

佐賀県農業技術防除センター

I. 予報の概要および各作物の特記事項

作物名	病害虫名 ^{注1)}	4 月の予想発生量 ^{注2)}		病害虫防除のてびきの記載頁 ^{注3)}	予報対象の病害虫 (抜粋)
		平年比	前年比		
大麦および小麦	赤かび病	並	並	134~136	 赤かび病
	うどんこ病	並	並	139	
<p>1. 赤かび病 本年の出穂期は平年より早くなる見込みである(佐賀県農業試験研究センター・佐賀県米麦改良協会: 令和3年3月19日付け麦づくり情報第4号参照)。ただし、播種時期等により生育にばらつきがあるため、圃場ごとの生育状況を確認し、適期に防除を行う。 大麦の防除適期は、葯殻抽出始め(出穂期の約2週間後)で、更に、その7日後頃に2回目の散布を行うと、効果が高まる。小麦での防除適期は、開花期(出穂期の約7~10日後)である。更に、開花約10~20日後に2回目の散布を行うと効果が高まる。詳細は令和3年3月22日付け病害虫対策資料第12号を参照する。</p>					
大麦	網斑病	多	並	137~138	
	<p>1. 網斑病 発生が平年より多く、一部の圃場では上位葉への進展が認められる。圃場での発生状況を確認し、出穂期~穂揃い期に本病を対象とした薬剤防除を徹底する。なお、本年の出穂期は平年より早くなる見込みであるため、防除時期を逸しないように注意する(令和3年3月22日付け病害虫対策資料第12号参照)。</p>				
水稻	いもち病	並	並	126~135 137~142	 いもち病
	ばか苗病	並	並	126~135	
タマネギ	べと病	早生マルチ	多	260~263	 タマネギ べと病 二次病斑
		中晩生	やや多		
	ポトリチス葉枯症	やや少	少	264	
	ネギアザミウマ	多	多	271~272	
<p>1. べと病 二次感染株の発生を広域で確認している。引き続き「定期的な切れ目ない薬剤防除」を地域ぐるみで確実に実施する(令和3年3月4日付け病害虫発生予察注意報第5号、令和3年3月18日付け病害虫対策資料第11号参照)。 2. ネギアザミウマ 発生が平年より多い。本虫は薬剤がかかりにくい葉と葉の隙間に寄生しているので、薬剤は十分量を用いる。なお、本虫の食害によりできた傷口があると他の病害に感染しやすくなるので、本虫の防除を徹底する。</p>					

作物名	病害虫名 ^{注1)}	4月の予想発生量 ^{注2)}		病害虫防除のてびきの記載頁 ^{注3)}	予報対象の病害虫(抜粋)
		平年比	前年比		
施設果菜類	<p>1. 虫害全般（アザミウマ類、コナジラミ類、アブラムシ類） 気温が高くなるに従い、施設内の害虫の増殖が盛んになるとともに、施設内への飛び込みが増加する。多発生を防ぐため、低密度時からの薬剤防除を行う。</p> <p>2. 病害全般（灰色かび病、菌核病、すすかび病、葉かび病、べと病、うどんこ病、疫病、褐斑病） 加温機の稼働頻度が低下し、植物体への結露が生じやすと考えられる。こまめな換気や早朝加温によって結露を防ぐとともに、発病部位の早期除去、予防的な薬剤防除を行う。</p>				
イチゴ(本圃)	ハダニ類	やや多	やや多	211~212	 ハダニ類
	うどんこ病	やや少	並	201~203	
	灰色かび病	多	多	204~205	
	アブラムシ類	多	多	216~217	
	<p>1. ハダニ類 一部で多発生圃場が認められる。発生圃場では、系統（IRACコード）が異なる薬剤を組み合わせ、5~7日間隔で防除を実施する。なお、使用できる殺ダニ剤が少ない場合は、気門封鎖系薬剤等を積極的に活用する。また、天敵を放飼した圃場であっても、ハダニ類の増加を認めた場合は、天敵への影響を考慮せず、有効な殺ダニ剤による防除を行う。（令和2年11月25日付け病害虫発生予察注意報第4号参照）。</p> <p>2. アザミウマ類 発生が多い圃場が認められる。果実での被害を防ぐため、発生を認めた場合は薬剤防除を行う。</p>				
(育苗圃)	<p>1. 炭疽病 近年、本病の発生が問題となっている。病原菌の伝染を防止するため、ビニル雨よけ育苗を行い、定期的な薬剤防除を実施する。また、灌水を過度に行うと、高湿度条件が長時間維持され、発病が助長されるため、灌水はその日の天候やポットの乾き具合を考慮して実施する。</p>				
キュウリ	べと病	並	並	180~181	 キュウリ黄化えそ病
	うどんこ病	やや少	やや少	178~179	
	褐斑病	やや少	並	183~184	
	灰色かび病	並	並	181~182	
	アザミウマ類	並	並	193	
	コナジラミ類	並	少	192	
	<p>1. ミナミキイロアザミウマ：黄化えそ病、タバココナジラミ：退緑黄化病 媒介虫の薬剤防除を徹底するとともに、ウイルス病の罹病株を認めた場合は、早急に除去し処分する。</p>				
トマト	葉かび病	やや多	並	228~229	 葉かび病
	灰色かび病	やや多	多	223~224	
	コナジラミ類	並	やや多	152~154 231~233	
	<p>1. タバココナジラミ：黄化葉巻病 一部の圃場で発生が見られる。発病株は抜き取り、適切に処分するとともに、媒介虫であるタバココナジラミの防除を徹底する。</p>				
アスパラガス	アザミウマ類	並	並	313~314	
	<p>1. 茎枯病、褐斑病、斑点病 立茎開始初期から薬剤防除を行う。また、発病茎は伝染源となるため、見つけ次第早急に除去し処分する。</p>				

作物名	病虫害名 ^{注1)}	4月の予想発生量 ^{注2)}		病虫害防除のてびきの記載頁 ^{注3)}	予報対象の病虫害 (抜粋)
		平年比	前年比		
果樹全般	果樹カメムシ類	やや少	少	250~253	
	1. 病虫害対策 本年は2~3月の気温が高く、果樹類の生育は平年より早く推移している。病虫害の防除対策が適時に行えるよう、こまめな圃場観察と早めの準備を心掛ける。				
カンキツ	そうか病	並	並	220~222	 ミカンハダニ
	かいよう病	並	並	224~226	
	ミカンハダニ	多	多	245~247	
	1. ミカンハダニ 本年は発生が多い。殺ダニ剤に対する感受性の低下を避けるため、4月~6月下旬はマシン油乳剤の使用を基本とする。ただし、樹勢が低下している樹や着花が少ない樹では、マシン油乳剤の散布を控え、殺ダニ剤散布で対応する。 2. かいよう病 前年発生園や風当たりが強い園、罹病性品種（レモン、ネーブル、はるみ等）の植栽園、新梢の伸長が遅くまで続く園（幼木園、高接園、隔年交互結実栽培園等）では、展葉初期の防除を徹底する。				
ナシ	黒星病	やや少	並	288~291	
	1. 黒星病 本病の重要な防除時期である開花直前~落弁期は、7~10日間隔で薬剤防除を徹底する。SSで散布を行う場合は必ず全列散布を行う。なお、降雨が続く場合はDMI剤の追加散布を行う。				
ブドウ	黒とう病	並	少	333~335	
	1. 黒とう病 新梢・新葉への感染を防ぐため、萌芽期~生育初期の薬剤防除を徹底する。				
キウイフルーツ	1. かいよう病 本病の特徴である、枝や幹から乳白色や赤褐色の樹液が漏出する症状（右写真参照）を確認した場合は直ちに発病部位を切除する。また、 <u>すべての園において</u> 、6月まで感染防止のため銅水和剤を主体とした 定期的な薬剤防除を実施 する。なお、幼木は成木に比べ発病しやすく、主幹部から樹液漏出して枯死するなどの激しい症状となるため、特に注意して防除対策を徹底する。				 かいよう病による樹液の漏出
茶	カンザワハダニ	やや多	並	418~419	 カンザワハダニ
	1. カンザワハダニ 多くの圃場で発生が確認された。多発後の薬剤散布では、防除効果が不十分となるため萌芽前までの防除を徹底する。また、薬剤散布は、葉裏や下位葉にも薬剤が十分かかるよう散布する。一番茶萌芽後に発生がみられた場合は、摘採前日数に留意し防除を行う。 2. チャトゲコナジラミ 新植、改植を行う場合は、定植する苗木に本虫の寄生がないか確認する。本虫が寄生していた場合は枝葉を落として定植し、定植直後にマシン油乳剤を散布する。除去した枝葉は土中に埋設するなど適切に処分する。				

作物名	病虫害名 ^{注1)}	4月の予想発生量 ^{注2)}		病虫害防除のてびきの記載頁^{注3)}	予報対象の病虫害 (抜粋)
		平年比	前年比		
キク	白さび病	やや少	やや少	377~378	 クロゲハナアザミウマ
	アザミウマ類	多	多	382~383	
	アブラムシ類	並	並	384~385	
	ハダニ類	並	並	383~384	
	ハモグリバエ類	並	並	386~387	
1. アザミウマ類 一部多発生圃場も確認されている。発生が確認される場合は、早急に防除を行う。本虫は葉裏や生長点付近などの薬液のかかりにくい部位に多く生息しているため、薬剤散布時にはこれらの部位にも薬液がかかるよう、十分量を丁寧に散布する。					

注1) 病虫害名に網掛けをしたものについては、予報の根拠とした内容を記載しています。

注2) 予想発生量については、平年および前年との比較により記載しているため、実際の発生量とは相違を生じる場合があります。例えば、例年の発生量が少ない病虫害について「平年および前年より多い」と予想した場合であっても、実際の発生量は多くない場合があります。

注3) 防除対策については「[佐賀県病虫害防除のてびき](#)」も参照してください。

II. 予報の内容・根拠等について

予報内容（来月の予想発生量）

- 平年（過去10年間）及び前年と比較し「少、やや少、並、やや多、多」の5段階で示しています。
なお、少発生が予想される病害虫等については、予報の概要のみの記載となる場合があります。

予報内容の根拠

- 農業技術防除センターが実施する県内各地での調査、防除員の調査、予察灯・トラップでの誘殺状況調査等に基づく発生現況、気象予報からみた病害虫の発生条件等を基に、関係者による発生予察会議で決定します。
○ 発生現況および気象条件が来月の病害虫の発生に及ぼす影響については、(－)：少発生、(－～±)：やや少発生、(±)：並発生、(±～＋)：やや多発生、(＋)：多発生として示しています。

防除上注意すべき事項

- 各病害虫を防除する上で特に注意すべき事項等を記載しています。なお、全般的な防除対策については「県防除のてびき」をご参照ください（1ページの予報の概要にリンク有り）。

写真

- 1～4ページ目：予報で対象とした病害虫を抜粋して掲載しています。
6ページ目以降：定期調査時の各作物の生育状況を掲載しています。

4月の気象条件

- 病害虫の発生に関与する4月の気象条件については、福岡管区気象台発表の1ヶ月予報（令和3年3月18日）を基に、「気温：平年より高い」、「降水量：平年並」と判断しています。

気象予報による要素別確率(%)及び病害虫の発生に関与する気象条件

要素	1ヶ月予報における4月の気象予報（確率予報%）			病害虫の発生に関与する気象条件（平年比）
	低い(少ない)	平年並 (佐賀市の平年値)	高い(多い)	
気温	10	20 (15.0℃)	70	高
降水量	40	30 (198 mm)	30	並

Ⅲ. 4月の予報

麦類

定期調査（大麦 22 圃場、小麦 22 圃場）
調査日：3月15～17日



定期調査圃場の様子(左:大麦、右:小麦)

1. 赤かび病

[【概要に戻る】](#)

1) 予報の内容

発生量：平年並（前年並）

2) 予報の根拠

(1) 4月の気象予報

気温は高く、降水量は並で、並発生の条件〈±〉

3) 防除上注意すべき事項

(1) 特記事項を参照。

2. 網斑病（大麦）

1) 予報の内容

発生量：平年より多い（前年並）

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 定期調査（図1参照）

発生茎率 19.6%（平年4.4%、前年28.9%）

平年比：多〈+〉 前年比：やや少〈-〜±〉

(2) 4月の気象予報

気温は高く、降水量は並で、並発生の条件〈±〉

3) 防除上注意すべき事項

(1) 特記事項を参照。

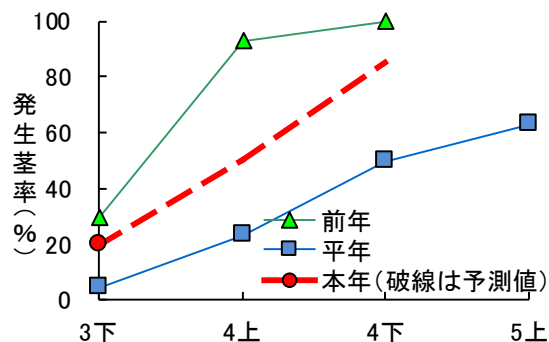


図1 大麦網斑病の発生推移

水稻

[【概要に戻る】](#)

1. いもち病（苗いもち）

1) 予報の内容

発生量：平年並（前年並）

2) 予報の根拠

(1) 前年の穂いもちの発生状況

令和2年の穂いもちの発生株率は、上場地域の早期水稻（8月上旬）で0%（平年5.0%）、北部山間の早植え水稻（9月上旬）で0%（平年9.1%）、普通期水稻（10月上旬）で5.1%（平年15.5%）であり、早期、早植え、普通期のいずれも平年よりやや少なかった。〈-〜±〉

3) 防除上注意すべき事項

(1) 種子更新を徹底する。

(2) 育苗箱で種糞が露出すると本病が発生しやすいので、覆土を適正に行う。

(3) 苗いもちがみられたら、早急に取り除くとともに防除を行う。

(4) 長期残効型の育苗箱施薬剤を施用する。

タマネギ

定期調査 20 圃場、防除員 4 圃場
調査日：3月15～19日



定期調査圃場の様子

1. ベと病（早生マルチ） [【概要に戻る】](#)

1) 予報の内容
発生量：平年より多い（前年より多い）

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

①定期調査（図1参照）

発生株率：5.2%（平年 1.2%、前年 7.6%）

平年比：多（+） 前年比：やや少（-～±）

(2) 感染好適気象条件の出現状況

県内及び隣接県の気象観測地点計4地点での2月11日～3月18日の気象解析結果によると、感染及び準感染好適条件が、2月20～22日、3月4～5日、3月13～14日、3月17～21日頃に広域に出現した（図2）（±～+）

(3) 4月の気象予報

気温は高く、降水量は並で、並発生の条件（±）

3) 防除上注意すべき事項

(1) 特記事項を参照。

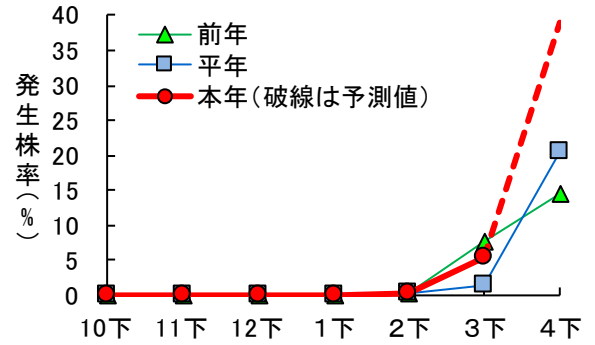


図1 早生タマネギでのべと病の発生推移

2. ベと病（中晩生）

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多い（前年よりやや多い）

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

①定期調査（図1参照）

発生株率：1.0%（平年 0.7%、前年 3.4%）

平年比：並（±） 前年比：少（-）

(2) 感染好適気象条件の出現状況

県内及び隣接県の気象観測地点計4地点での2月11日～3月18日の気象解析結果によると、感染及び準感染好適条件が、2月20～22日、3月4～5日、3月13～14日、3月17～21日頃に広域に出現した（図2）（±～+）

(3) 4月の気象予報

気温は高く、降水量は並で、並発生の条件（±）

3) 防除上注意すべき事項

(1) 特記事項を参照。



定期調査圃場の様子

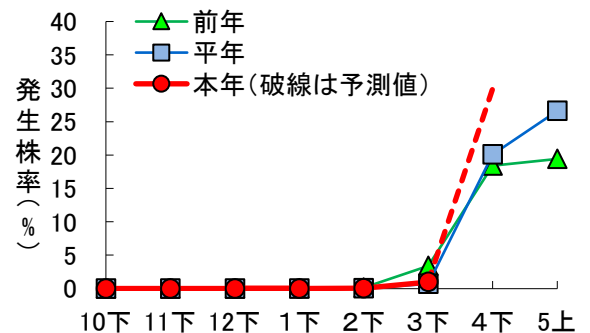


図1 中晩生タマネギでのべと病の発生推移

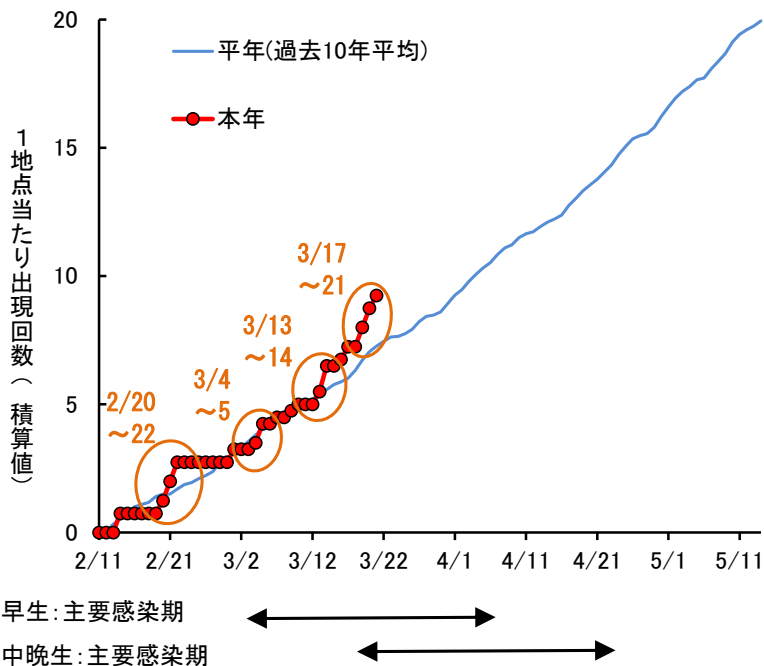


図2 タマネギべと病の感染・準感染好適気象条件の出現延べ回数

注1) 1地点当たりの感染・準感染好適条件の出現回数の積算値を示した。

注2) 感染・準感染好適条件が現れた場合、感染株では約2週間後から、初発生あるいは発病株(病斑数)の増加が予想される。

3. ボトリチス葉枯症

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや少ない (前年より少ない)

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 定期調査 (図1参照)

発生株率：0.5% (平年3.3%、前年13.7%)

平年比：やや少(±~-) 前年比：少(-)

(2) 4月の気象予報

気温は高く、降水量は並で、並発生の条件(±)

3) 防除上注意すべき事項

(1) 発生を認めた場合には、速やかに薬剤防除を実施する。

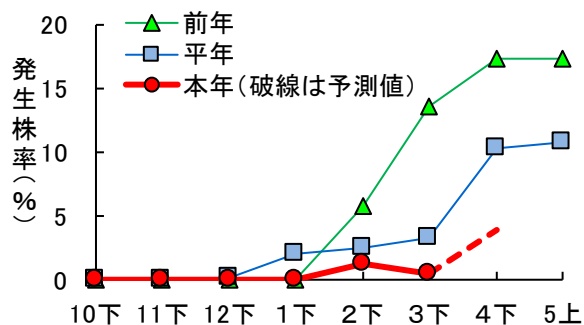


図1 タマネギボトリチス葉枯症の発生推移

4. ネギアザミウマ

1) 予報の内容

発生量：平年より多い (前年より多い)

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 定期調査 (図1参照)

発生株率：14.2% (平年3.7%、前年10.5%)

平年比：多(+) 前年比：やや多(±~+)

(2) 4月の気象予報

気温は高く、多発生の条件(+)

3) 防除上注意すべき事項

(1) 特記事項を参照。

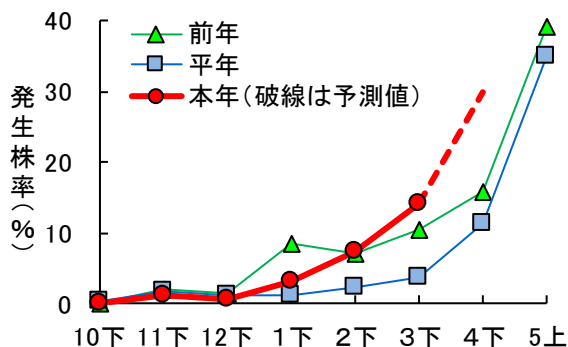


図1 ネギアザミウマのタマネギでの発生推移

イチゴ（本圃）

定期調査 10 圃場、防除員 6 圃場
調査日：3 月 16～18 日



定期調査圃場の様子

1. ハダニ類

[【概要に戻る】](#)

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多い（前年よりやや多い）

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 定期調査（図 1 参照）

発生株率：31.5%（平年 21.8%、前年 32.0%）

平年比：やや多（±～+） 前年比：並（±）

(2) 防除上注意すべき事項

(1) 薬剤防除の際は、下葉や葉裏まで薬液が付着するように十分量を丁寧に散布する。

(2) その他については、特記事項を参照する。

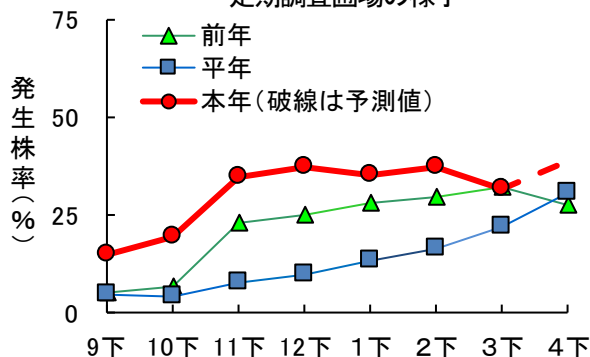


図1 ハダニ類のイチゴでの発生推移

2. うどんこ病

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや少ない（前年並）

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 定期調査（図 1 参照）

発生株率：0%（平年 3.4%、前年 2.3%）

平年比：やや少（-～±） 前年比：やや少（-～±）

(2) 4 月の気象予報

降水量は並であることから、並発生の条件（±）

(3) 防除上注意すべき事項

(1) 特記事項（施設果菜類の項）を参照。

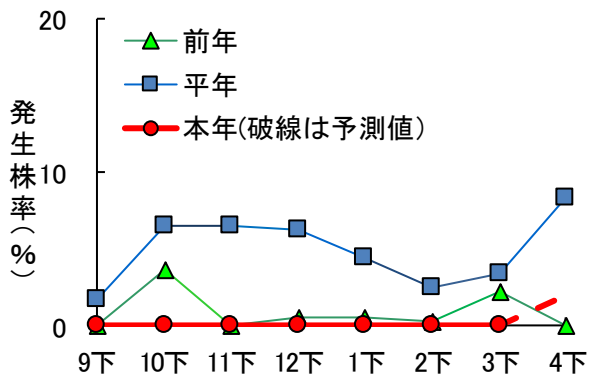


図1 イチゴうどんこ病の発生推移

3. 灰色かび病

1) 予報の内容

発生量：平年より多い（前年より多い）

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 定期調査（図 1 参照）

発生果率：1.7%（平年 0.5%、前年 0.4%）

平年比：多（+） 前年比：多（+）

(2) 4 月の気象予報

降水量は並であることから、並発生の条件（±）

(3) 防除上注意すべき事項

(1) 「いちごさん」では受粉後の花弁が外れにくいいため、果実での被害が発生しやすい。ブローア等を用い定期的に花弁を除去する。

(2) その他については、特記事項（施設果菜類の項）を参照する。

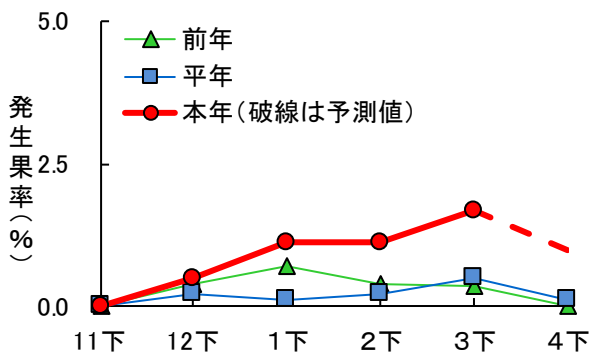


図1 イチゴ灰色かび病の発生推移

4. アブラムシ類

1) 予報の内容

発生量：平年より多い（前年より多い）

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

①定期調査（図1参照）

発生株率：5.5%（平年0.6%、前年3.0%）

平年比：多（+） 前年比：多（+）

3) 防除上注意すべき事項

(1) 薬剤防除の際は、発生初期にミツバチへ影響の小さい薬剤を散布する（県病害虫防除のてびき P531～535）。

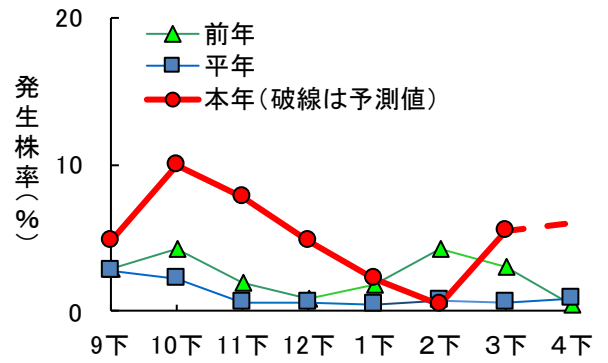


図1 アブラムシ類のイチゴでの発生推移

キュウリ

定期調査5圃場、防除員4圃場

調査日：3月15～17日



定期調査圃場の様子

1. ベと病

[【概要に戻る】](#)

1) 予報の内容

発生量：平年並（前年並）

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

①定期調査（図1参照）

発生株率：3.3%（平年6.3%、前年13.6%）

平年比：並（±） 前年比：少（-）

(2) 4月の気象予報

降水量は並であることから、並発生の条件（±）

3) 防除上注意すべき事項

(1) 特記事項（施設果菜類の項）を参照

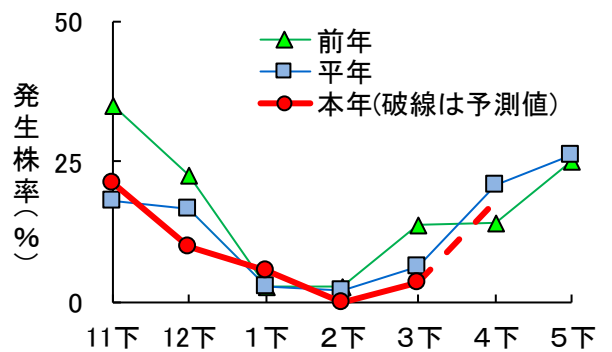


図1 キュウリベと病の発生推移

2. アザミウマ類

1) 予報の内容

発生量：平年並（前年並）

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

①定期調査（図1参照）

発生株率：1.7%（平年3.0%、前年10.0%）

平年比：並（±） 前年比：少（-）

3) 防除上注意すべき事項

(1) 特記事項を参照。

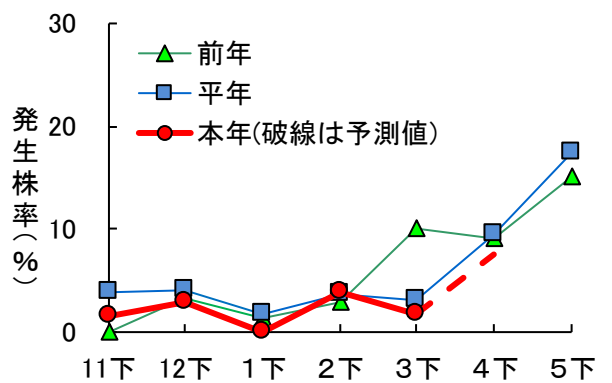


図1 アザミウマ類のキュウリでの発生推移

トマト

定期調査 6 圃場、防除員 4 圃場
調査日：3 月 16～18 日



定期調査圃場の様子

1. 葉かび病

[【概要に戻る】](#)

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多い（前年並）

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 定期調査（図 1 参照）

発生株率：9.5%（平年 5.1%、前年 10.0%）

平年比：やや多（±～+） 前年比：並（±）

(2) 4 月の気象予報

降水量が並で、並発生の条件（±）

3) 防除上注意すべき事項

(1) 特記事項（施設果菜類の項）を参照。

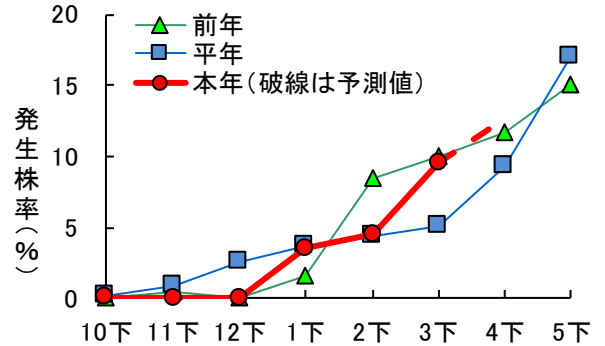


図1 トマト葉かび病の発生推移

2. 灰色かび病

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多い（前年より多い）

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 定期調査（図 1 参照）

発生株率：10.5%（平年 6.4%、前年 3.5%）

平年比：やや多（±～+） 前年比：多（+）

(2) 4 月の気象予報

降水量が並で、並発生の条件（±）

3) 防除上注意すべき事項

(1) 特記事項（施設果菜類の項）を参照。

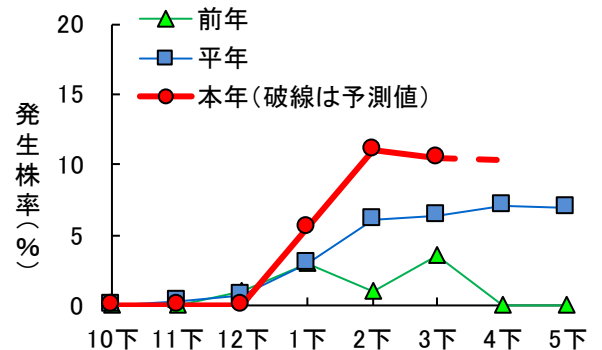


図1 トマト灰色かび病の発生推移

3. コナジラミ類

1) 予報の内容

発生量：平年並（前年よりやや多い）

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 定期調査（図 1 参照）

発生株率：2.5%（平年 2.4%、前年 2.5%）

平年比：並（±） 前年比：並（±）

3) 防除上注意すべき事項

(1) 特記事項を参照。

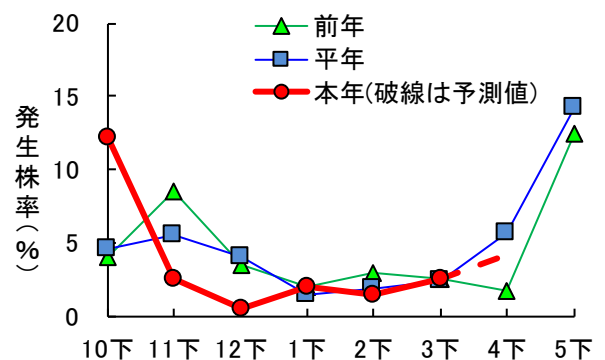


図1 コナジラミ類のトマトでの発生推移

果樹全般

1. カメモシ類

[【概要に戻る】](#)

1) 予報の内容 (4月～8月上旬)

発生量：平年よりやや少ない (前年より少ない)

2) 予報の根拠

(1) チャバネアオカメモシの越冬状況調査 (表1)

- ①越冬地点率：18.8% (平年 40.6%、前年 75.0%)
平年比：少ない<-> 前年比：少ない<->
- ②平均越冬虫数：0.12 頭/m² (平年 0.29 頭/m²、前年 0.60 頭/m²)
平年比：やや少ない<-~±> 前年比：少ない<->

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 圃場をよく観察し、飛来を確認したら早急に防除を行う。

表1 チャバネアオカメモシの越冬状況 (R3年1月中旬～2月中旬調査)

調査地域	R3	平年	前年 (R2)
	頭/m ²	頭/m ²	頭/m ²
みやき町	0	0.30	0.3
神埼市	0.3	0.87	1.0
佐賀市	0	0.06	0
小城市	0	0.15	1.3
多久市	0	0.12	0
唐津市1	0	0.15	0.0
唐津市2	1.3	0.15	0
唐津市3	0	0.09	0
伊万里市1	0	0.27	1.0
伊万里市2	0	0.42	1.0
武雄市	0	0.42	1.7
鹿島市1	0	0.30	1.0
鹿島市2	0	0.36	1.0
鹿島市3	0.3	0.30	0.3
太良町1	0	0.31	0.3
太良町2	0	0.09	0
平均	0.12	0.29	0.60
越冬地点率 (%)	18.8	40.6	75.0

各地点3か所 (1か所/m²) の落葉を採集して持ち帰り、その中から確認した越冬虫数の平均
 平年値はH23～R2までの10か年の平均

カンキツ

定期調査 8 圃場

調査日：3月13～16日

1. そうか病

[【概要に戻る】](#)

1) 予報の内容

発生量：平年並 (前年並)

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

- ①定期調査 (図1 参照)
発生葉率：0% (平年 0%、前年 0%)
平年比：並<±> 前年比：並<±>

(2) 4月の気象予報

降水量が並で、並発生の条件<±>

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 温州みかんでは、展葉初期 (最も伸びた新梢が1cm程度) に必ず薬剤防除を実施する。



定期調査圃場の様子

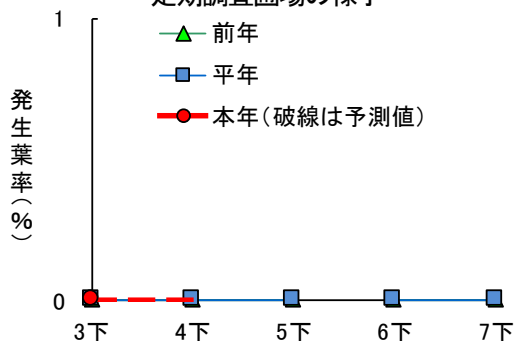


図1 カンキツそうか病の発生推移

注) 5月下旬までは旧葉を調査

2. かいよう病

- 1) 予報の内容
発生量：平年並（前年並）
- 2) 予報の根拠
 - (1) 発生の実況
 - ① 定期調査（図1参照）
発生葉率：0%（平年0.1%、前年0%）
平年比：並（±） 前年比：並（±）
 - (2) 4月の気象予報
降水量が並で、並発生条件（±）
- 3) 防除上注意すべき事項
 - (1) 特記事項を参照。

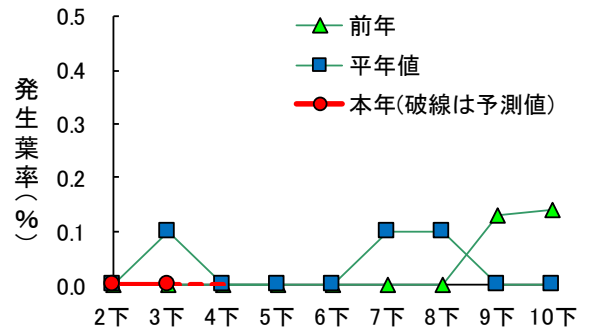


図1 カンキツかいよう病の発生推移

注) 5月下旬までは旧葉を調査

3. ミカンハダニ

- 1) 予報の内容
発生量：平年より多い（前年より多い）
- 2) 予報の根拠
 - (1) 発生の実況
 - ① 定期調査（図1参照）
発生葉率：8.0%（平年2.2%、前年1.5%）
平年比：多（+） 前年比：多（+）
 - (2) 4月の気象予報
気温が高く、降水量が並で、多発生条件（+）
- 3) 防除上注意すべき事項
 - (1) 特記事項を参照。

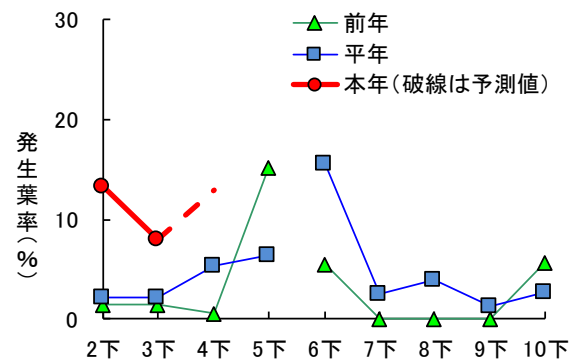


図1 ミカンハダニの発生推移

注) 5月下旬までは旧葉を調査

ナシ

1. 黒星病

[【概要に戻る】](#)

- 1) 予報の内容
発生量：平年よりやや少ない（前年並）
- 2) 予報の根拠
 - (1) 昨年秋の発生状況
 - ① 定期調査（令和2年9月下旬）
発生葉率：0.2%（平年0.8%、前年0%） 平年比：やや少（-～±） 前年比：並（±）
このことから、園内の菌密度は、平年よりやや少なく、前年並と考えられる。
 - (2) 4月の気象予報
降水量が並で、並発生条件（±）
- 3) 防除上注意すべき事項
 - (1) 特記事項を参照。

ブドウ

1. 黒とう病

[【概要に戻る】](#)

1) 予報の内容

発生量：平年並（前年より少ない）

2) 予報の根拠

(1) 昨年秋の発生状況

① 定期調査（令和2年8月下旬）

発生葉率：0%（平年0.4%、前年1.7%） 平年比：並（±） 前年比：少（-）

このことから、園内の菌密度は、平年並で前年より少ないと考えられる。

(2) 4月の気象予報

降水量が並で、並発生の条件（±）

3) 防除上注意すべき事項

(1) 特記事項を参照。

茶

定期調査7圃場

調査日：3月17～18日

1. カンザワハダニ

[【概要に戻る】](#)

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多い（前年並）

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 定期調査（図1参照）

発生葉率：4.6%（平年5.6%、前年8.1%）

平年比：並（±） 前年比：やや少（-～±）

(2) 4月の気象予報

気温は高く、降水量は並で、多発生の条件（+）

3) 防除上注意すべき事項

(1) 特記事項を参照



定期調査圃場の様子

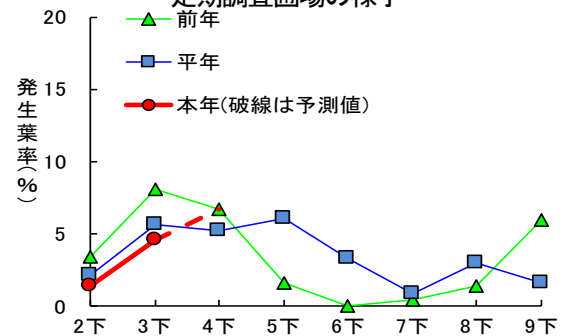


図1 カンザワハダニの茶での発生推移

キク

定期調査8圃場

調査日：3月15～17日

1. 白さび病

[【概要に戻る】](#)

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや少ない（前年よりやや少ない）

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 定期調査（図1参照）

発生株率0%（平年2.7%、前年8.3%）

平年比：やや少（-～±） 前年比：少（-）

(2) 4月の気象予報

降水量が並で、並発生の条件（±）



定期調査圃場の様子

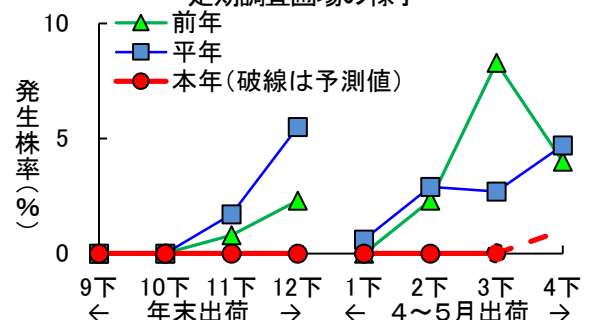


図1 キク白さび病の発生推移

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 換気を行うなど、施設内の適切な湿度管理に努めるとともに、発病前からの定期的な薬剤散布を実施する。
- (2) 発病を認めたら、罹病葉を除去し圃場外へ持ち出し適切に処分する。

2. アザミウマ類 (クダヒアザミウマ、ミナキイロアザミウマ、ミカンキイロアザミウマ)

1) 予報の内容

発生量：平年より多い (前年より多い)

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 定期調査 (図1 参照)

発生株率 14.3% (平年 3.0%、前年 0%)

平年比：多<+> 前年比：多<+>

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 主にミカンキイロアザミウマが媒介するキクえそ病 (TSWV)・キク茎えそ病 (GSNV) の発病株は早急に抜き取り、圃場外へ持ち出し適切に処分する。
- (2) 薬剤感受性の低下を防ぐため、同一系統の薬剤を連用しない。
- (3) その他については特記事項を参照する。

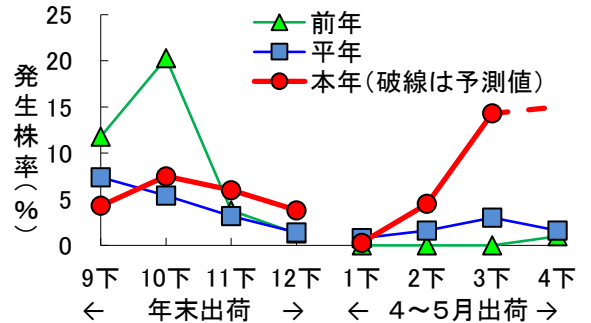


図1 アザミウマ類のキクでの発生推移

3. ハダニ類

1) 予報の内容

発生量：平年並 (前年並)

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 定期調査

発生株率 0% (平年 2.1%、前年 0.3%)

平年比：やや少<-~±> 前年比：並<±>

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 葉裏や下位葉にも薬剤が十分かかるよう散布する。
- (2) 薬剤感受性の低下を防ぐため、同一系統の薬剤を連用しない。

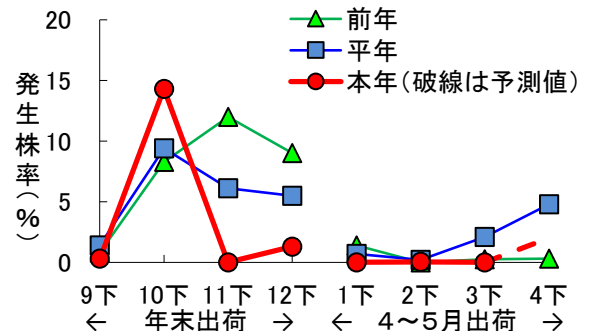


図1 ハダニ類のキクでの発生推移

連絡先：佐賀県農業技術防除センター 病害虫防除部

〒840-2205 佐賀市川副町南里 1088

TEL (0952) 45-8153 FAX (0952) 45-5085

Mail nougyougi.jutsu@pref.saga.lg.jp

ホームページアドレス https://www.pref.saga.lg.jp/ki_ji00321899/index.html

